

〔査読論文〕

移動と定住の弊害を克服する

——新しい観光の可能性——

堀 内 史 朗

アブストラクト

ジョン・アーリの主著『モビリティーズ』以来、移動と定住の意義が問い直されてきた。啓蒙思想が追及してきた理性とは、移動することによって獲得することが期待されてきたものだった。存在の哲学が重視してきたコミュニティとは、定住によって可能になることが期待されてきたものだった。しかし移動には「孤立を生み出す」「環境破壊を促進する」「個人間の格差をもたらす」という弊害が、定住には「他者への想像力が欠落する」「権威主義的な社会を産み出す」「地域間の格差をもたらす」という弊害がある。本稿は、仕事の生産性を上げるため余暇におこなわれることの多かった従来型の観光とは違う、コロナ禍を経て拡大することが期待される、人間としての成長のための「新しい観光」が、このような移動と定住がもたらす弊害を克服する可能性を指摘し、その促進のために必要な条件について考察する。

Abstract

Since John Urry's seminal book, "Mobilities", the significance of mobility and settlement has been reexamined. Reason, pursued by the Enlightenment, was expected to be acquired through individuals' mobilities. Community, which the philosophy of existence has emphasized, is expected to become possible through individuals' settlements. However, mobilities has the negative effects of "creating isolation", "promoting environmental destruction", and "bringing about disparities among individuals", while settlement has the negative effects of "lacking imagination for others", "producing an authoritarian society", and "bringing about disparities among regions". This paper points out the possibility and necessary conditions to facilitate new types of tourism, which is different from conventional tourism that is often conducted in one's leisure time to increase work productivity. New types of tourism is expected to resume after the pandemic of COVID-19 and overcome these negative effects of mobilities and settlements.

I はじめに

人・モノ・カネ・情報の国境を越えた移動、いわゆるグローバル化がいつから始まったかという点については論者によって立場が異なる。ただ、ソ連が崩壊して冷戦が終わった1991年以降に、その範囲や規模、速度が年を追うごとに大きくなってきたことについては、おおかたの意見が一致することだろう。そこからミレニアムを跨いで、EUの統合・拡大、中国やインドの産業資本主義化、そのほかの後進国の成長により、グローバル化の程度は全世界に及んできた。そのことによって、移動と定住、そして観光の意義と弊害が注目されてきた。

グローバル化の諸側面の中で、人の移動に着目する。移動手段の技術革新が進んだおかげで、私たち

が移動できる範囲はますます広がってきた。ジョン・アーリは、著書『モビリティーズ』のなかで、さまざまな移動ツールや社会インフラ、移動に対する人々の考え方の変化によって、私たちの行動範囲が大きく変わってきたこと、それゆえに私たちが社会を捉える理論を大きく変容すべきであることを、それまでの理論の蓄積を概観することで説明している (Urry 2007 = 2015, 第2章)。道路が舗装され、鉄道網がゆきわたり、外出がしやすくなった。自動車が多くの人に普及して、LCCが発着数を増やし、国際観光客が急増した。遠距離の人との交渉が容易にできるようになり、これまで数年に一度しか会うことができなかった同級生や親戚とも容易に会うことができるようになった。またインターネット回線が普及し、多くの人がSNSで情報交換や遠隔地のことを知るようになった。その結果として、特定の生活・仕事の拠点を持たず、移動しながら生活を送るモバイルワーカーや、複数の仕事・生活の拠点を持つライフスタイルが可能になってきた。このような仕事・生活の変化が、価値観の変化をもたらし、社会や技術へさらなる影響を与えることを、アーリらは『モビリティーズ』、あるいはそれ以降の研究において論じている (Elliott and Urry 2010 = 2016; Urry 2016 = 2019)。

ところが2010年代の後半になって、移動の拡大に歯止めがかけられた。イギリスにおけるブレグジットのように、国境を自由に超えて人々が訪れることを拒む動きが出た。アメリカとメキシコの間に壁を造ると主張するトランプ大統領が当選した。そのほかにも、各地で反グローバル化の運動が広がった。シリア・イラクにおけるISILもそのひとつとして捉えられるだろう。2020年になって、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中で、移動が極端に抑制された。パンデミックが収束するのをまたず、ロシアとウクライナの間で戦争が始まってしまい、国境を越えての自由な移動がますます抑制されている。領域を越えて移動する人々に対し、テロリスト、犯罪者、異教徒、ウイルス感染者、侵略者のように、負のイメージが与えられている。むしろ、ある地域・国家で定住し、そこの自然や文化、歴史、国家に対して深い愛着や忠誠心を持つことに、より大きな価値が置かれるようになってきているようにも見える。このような、移動への反発、定住することへの再評価は、実は2010年代の後半よりも以前から、用意されてきたものである。

移動と定住は、冷戦が終わった以降の30年間ほどを見ても、その程度が大きく振幅してきた。本稿では、これまで移動と定住について交わされてきた論点を振り返りつつ、その意義と弊害について論じていく。これからの時代において広がることが期待される、後述する「新しい観光」が、移動と定住がもたらす弊害を克服する可能性について考察していく。

II 移動と定住

1. 移動が可能にする理性

19世紀までに発展してきた啓蒙思想は、神の助けを借りず、自ら考え判断する自立した個人、あるいは「理性」を追求してきた。移動は、理性を獲得するために必要な手段として位置づけられていたと考えられる。たとえばデカルト、モンテスキュー、ルソーなど、初期の啓蒙思想家とされる人々は、各地を放浪することで自分たちが当たり前と思って暮らしている社会を相対化し、自らの思想を発展させた。普遍的な観点からものごとを考え、理解し、感じるためには、自分たちの立場を相対的に俯瞰するための移動が必要だったのだろう。後の時代のカントは、神に頼ることなく、真なる認識、善なる倫理、美的な判断をもつにいたる道筋を明らかにしようとしている (Kant 1787 = 1961, 1788 = 1979, 1790 = 1964)。ヨーロッパだけでなく世界にはさまざまな社会・文化があることを知り、そのうえで普遍的な精神をもったドイツ人・世界市民であろうとする気持ちがあったのだろう。カント自身は、あまり移動はしなかったようだが、ケーニヒスベルクという、当時のドイツ (プロシア) における辺境地で、地理学や人間学を

講じた(柄谷2010, p134)。そのような環境にいたからこそ、自分が暮らしている地域社会を相対化し、他地域への想像力を持つ超越論的批判が可能だったと考えられる。またヘーゲルは、家族やコミュニティ、そして国家を超えた、より大きな社会に統合される絶対知が生まれる過程を、意識の成長の物語として位置付けている(Hegel 1832 = 1998)。意識が成長する上でぶつかっていく他者との出会いが挫折・失敗をもたらし、その障害を乗り越えていく過程に自由が見出される(高山2016)。他者との出会いは、移動によってこそ可能なのではないか。

以上のように発展してきた啓蒙思想の中で期待されていた理性とは、聖書などのテキストをただ額面どおりに読み込み暗唱するのではなく、自然、社会、人間を観察し、それまで当たり前だと思っていた価値観を相対化して、世界市民としての行持を持つとうとする中で育まれる。そのために、ふだんの生活で見る当たり前・常識をカッコに入れる手段としての移動が必要なのである。自由や民主主義を尊重する思想、また科学技術の発展や産業資本主義の成功も、理性を追求することに正当性を与えていた。

ところが19世紀後半から20世紀初頭にかけて、このような自立した個人、理性への信頼がゆらいできた。その背景には、資本主義がもたらす格差と恐慌(マルクス)、増える精神疾患と発見された無意識(フロイド)、人間が見出した価値に根拠はないとみなすニヒリズム(ニーチェ)、そして理性が可能にすると期待された秩序ある社会への期待を根底的に否定した第一次世界大戦とロシア革命があったと言える。西欧社会で発展してきた理性を絶対視する考えへの疑問が広がり、「西洋の没落」(シュレーンゲラー)と言われるようになった。西欧発の啓蒙思想が、帝国主義を経て世界に広まる中で、逆説的に西欧が素晴らしいとする考えが、当時の人々の間から失われていった。むしろ西欧こそが、暴虐的な側面をそれ以外の世界に対して向ける抑圧的な側面が発見された。迷妄から解き放たれた自立した個人によって獲得することを期待された理性もまた、問題を含むものであることが発見されたのである。

移動がもたらす弊害の一つに孤立がある。移動することで住んでいた地域と疎遠になる。とくに、多くの人が匿名となって集まっては去る、地域コミュニティが形成されにくい都市部において、その弊害は深刻である。早くも19世紀から20世紀の移り変わりの時期に、周囲から孤立した人が自殺という病理に至る確率が高くなることを、デュルケームは社会学の古典的な著作である『自殺論』のなかで、地域間・宗教間・時系列比較によって明らかにしている(Durkheim 1897 = 1985)。今日において、孤立は都市だけでなく、車社会が広がって対面の出会いの機会が損なわれたあらゆる地域に見られる。孤立という社会病理は社会学の重要なテーマとしても位置づけられている(Putnam 2000 = 2006)。そして新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおいて、オンライン会議などのテクノロジーが開発され、普及し、自宅にとどまりながら世界中の人とつながることができるようになった。物理的・時間的な障害を超えて、バーチャルな移動ができるようになったと捉えることができる。その反面、近所に居るはずの身近な人との対面での出会いができない。バーチャルな移動が進んだことで、孤立は促進したと考えられる。

過剰な移動によって、環境が破壊される。化石燃料の使用によるガスの排出は地球温暖化の原因になる。悪天候による旱魃がおり、飢饉とそれに引き続く内乱は難民発生の原因になる。本人の望まない、止むにやまれぬ移動が強制される。後進国においては、海岸・河川のそばの劣悪な環境に住まざるを得ない人びとの生活は危険に曝される。先進国においても、2005年のハリケーン・カトリナの際に露わになったように、緊急時に逃げることができる人とできない人の格差が深刻である。災害や暴力の危険から逃げようとしても、避難しようとする国・地域の政治判断で国境が閉鎖され、かりに逃げることができたとしても難民として劣悪な環境に追い込まれ、差別や搾取を受けることにもなる(de Haas et al. 2020)。こうした環境破壊を抑止するためには、環境科学への理解だけでなく、当たり前のように広がっている自然がかけがえのないものであると感ずることが必要である。気候変動などの現象に気づき、科学的な観点から環境保護の必要性が求められるようになった時点で、すでに環境破壊は進んでしまっ

いる。理性ではなく、感性による、環境を守ろうという意識がまずは求められる。

21世紀になって、格差の拡大が強調されている。そこにも移動が原因として働いている。移動が日常的な都市において、人は他者との差別化・卓越化を図ろうとするため自身の成長に磨きをかけるが、そのことが過剰な能力主義をもたらし、格差や、取りこぼされた人の不満怨嗟はかえって拡大する (Sandel 2020 = 2021)。課税を逃れるために移動を行う人々もいるが、これは一部のグローバルエリートのみが利用できる手段であり、経済発展が見込めない中での資本金格差が拡大する要因になっている (Piketty 2013 = 2014)。誰もが自由に移動できるわけではなく、移動手段へのアクセスには格差がある。収入が低い、障害を持つ、などの理由で不利益な立場にある弱い人々は、自動車や飛行機などの移動手段から排除されるばかりか、自動車・飛行機での移動を前提とした社会システムからも、たとえば遠隔での買い物や投票ができないなどの面で、排除されている。また、社会的偏見などのために、移動が困難な人もいる。国や地域によっては、女性や子供が外出に際して制限を加えられることもある。そして新型コロナウイルス感染症のパンデミックをうけて、自家用車などで安全な移動ができてテレワークができる人と、公共交通で通勤し対面での仕事をせざるを得ない人の格差がますます拡大してしまった (Sheller 2018, 2021)。

人々を孤立させ、環境を破壊し、格差を拡大する移動など不要なのかもしれない。人々が、身近な世界のなかで満足し、下手に向上心や好奇心など持たないほうが、孤立によって精神を患うことも、環境が破壊されることもなく、格差も広がらないのかもしれない。こうして、地域やコミュニティに根付いて定住することが、強く要請されてきているように見える。

2. 定住とコミュニティ

フッサールが開始した現象学によって、「ある」とはどういうことなのかという、存在についての問いが深められるようになった。移動することへの疑問が、定住することで感じられる存在の意義を問う思想を促進したという側面もあったのかもしれない。ハイデッガーは、近代化の中で失われてきた伝統や土地、コミュニティとの関係性を問い直す中で、存在の意義を再評価した。たとえば『芸術作品の根源』(Heidegger 1960 = 2008)において、芸術の本質を、自分が当たり前のように認識している世界が、生活・歴史・文化の基盤となる大地との対立によって揺り動かされるものとして見ている。その対立を引き起こすような作品こそが素晴らしい作品である。具体例として、ゴッホ作の「農婦の靴」があげられる。この靴を見たものは、大地の冷たさと豊穡さ、農婦の生活などに思いを馳せる。このような認識をもたらす作品こそが芸術の本質を持つとされる。

ハイデッガーと同時代人であり、日本の哲学界に大きな足跡を残した和辻哲郎は、代表作の『風土』(和辻 1979)において、人間関係が、その土地の自然との相互作用の中で、その地域特有の風土をつくりあげていくのであり、その結果として社会、芸術、哲学などが独自の発展を遂げていくことを、モンスーン型、砂漠型、牧草型などと気候を類型化して論述している。あるいは『日本倫理思想史』(和辻 2011-2012)においては、原始時代から幕末・明治時代まで、時代ごとの政治体制などに対応して支配的な倫理思想が広まってきたことを論述している。ここにおいて、西洋で支配的だった、自立した個人によって作り上げられる普遍的な倫理という考え方が相対化されている。人はその生まれ育った場所・時代に縛られて、そこで支配的な倫理に埋め込まれる。ある場所・時代に運命づけられた、そこに暮らす人々の考えを重視する思想は、互いに運命共同体であるが故に協力し合う気持ちを人々に促すだろう。

以上のように、20世紀になって発展してきた存在の哲学、あるいは定住を重視する思想は、人々が暮らしている場所の自然・歴史・文化・民族への意識を高める効果があったと言える。移動には孤立や環境破壊、格差をもたらし側面がある。これらは移動の弊害というよりは、移動によって拡大する資本主

Mar. 2023

移動と定住の弊害を克服する

義の弊害と言えるのかも知れない。ともあれ、そうした弊害を避けるため、定住を重視して、自然と接する、清貧の思想などが生まれてきた。今日における持続可能な開発、SDGsなどの考え方へつながる側面もあったと言えるだろう。

しかし、ある場所に定住し、コミュニティに所属しようとしても、すでにグローバル化を経験した多くの国・地域において、昔ながらのコミュニティは残っていないことが多い。発見された自然や歴史、文化、伝統もまた、すでに開発によって失われてきたものであるのにも関わらず、それが昔ながらに残っていると、過剰に理想化されてしまったものなのではないか。たとえば、現実にそこで暮らしている人々は洪水や旱魃、獣害などに苦しんでいるにもかかわらず、自然の厳しさをろくに知らない人間による画一的な自然保護の考えを押し付けるといような、先進国と後進国、あるいは都市と田舎の住民の対立が見られることもある。このように、他者とのコミュニケーションを伴わない独善的な価値観の押し付けを、バルクは環境ファシズムとして批判している（バルク 1996）。移動しないために空間的に別の場所にいる他者を見だしにくくなってしまいうのである。リアルな他者との出会いを奪われてしまうことで出来上がってしまう狭い視野のために、外部者に対する差別や敵愾心ももたらされがちである。移動によって、さまざまな生き方がある事を知ること、逆説的に自分が何者であるかを知ることができたはずの人生の豊かさが失われてしまう。

地域は、適度に外部との交流があってこそ美しくなるのである。いっさいの移動を行わなかったとしても、SNSが普及しているため、遠距離の人間と交流できるが、そこにおいて、かえって似通った人間との交流が求められるようになる。代理的に、なにかの指標を共有する再帰的なコミュニティが創造される。そこで共有されるのは「日本人」「男性」「健常者」「異性愛者」などのような漠然とした多数派のアイデンティティであり、それらは得てして「外国人」「女性」「障がい者」「性的マイノリティ」などの少数派を排除する排他的なものになりがちである（Bauman 2001 = 2008）。いざとなれば物理的に接触できる緊張感や安心感がないとき、相手がかげがえのない人間であるという想像力は失われてしまう。そのようにして出来上がっていく社会関係とは、より閉鎖的で、似たような意見のものばかりになる。互いの価値観の違いを尊重することができるコミュニティや、その根拠になる自然・歴史・文化・伝統が失われてしまっているのならば、そうしたイメージを与えてくれそうなカリスマを盲目的に支持する権威主義へ人々は陥らざるを得ないのではないか。自分たちと異なる意見を発する者を悪魔とみなし、絶対的な異質な他者が不気味な様相を呈して現れる。犯罪への恐怖感も増していくだろう。

さらに、定住によってもたらされるコミュニティがあまりに絶対視されると、地域へ対する忠誠心が要求されるだろう。自分達の暮らす地域が、他の地域よりも優れていることを期待する。そのような期待が、地域間の競争を、その結果としての地域間格差をもたらすかもしれない。地域間競争の弊害は、全体としての人口減少が急速に進んでいる日本、とりわけ地方において典型的にみられる。限りある人口、それに伴う労働力や資本を地域間で奪い合おうとするために、過剰な投資や長期的には維持できないような人口争奪のサービスが提供されている。目を世界に広げてみれば、領土や主権を奪い合う戦争が、ロシア・ウクライナの間で起こってしまった。それ以外にも、石油や天然ガスなどの有限な資源をめぐる戦争がこれからも起こるかもしれない。世界的には人口が増加しているのであり、これまでは無限にあると思われてきた水や空気などの資源すら、貴重なものとして国・地域間で奪い合うことになって不思議はない。

過剰な移動が人々を孤立させ、環境破壊の原因になり、個人間の格差を拡大する側面は否定できない。しかし移動を否定した定住には、他者への想像力を奪い、権威主義的な社会を作り上げ、そして地域間の格差を広げてしまう側面がある。

3. 移動と定住の間

前節まで、これまでの啓蒙思想が、移動によって自立した理性を持った個人が生まれることを期待していたことを確認した。存在の哲学が、定住によってコミュニティへの所属が可能になることを期待してきたことも確認した。そのいっぽうで、移動と定住には、それぞれに問題点があることも確認した。移動がもたらす弊害は、「人々の孤立を生み出す」「環境破壊の原因になる」「個人間の格差を拡大する」の三つにまとめられるだろう。定住がもたらす弊害は、「他者への想像力の欠落」「権威主義的な社会を生み出す」「地域間の格差を拡大する」の三つにまとめられるだろう。

この移動と定住の弊害を克服することこそが、いまの21世紀の私たちが直面する課題と言える。すでに20世紀の後半になって出てきた、一連の現代思想のテキストは、自由な個人が移動することで獲得する理性と、定住によって獲得されるコミュニティの二項対立や、その弊害を問いたすものだったように見える。そのことを確認してみよう。

たとえばドゥルーズとガタリは、私たちが普段の生活の中で当たり前と思っている理性やコミュニティなどの根底には、資本主義と精神分析による主体の形成と、人々の内面の支配があることを見出している。その弊害を克服するために、人々が本来持っているさまざまな欲望を、資本主義と精神分析による支配から解放することが必要であることを示唆してきた。『アンチ・オイディプス』においてはさまざまに織り成すテキストで、人々の欲望を資本主義・精神分析から解放することの意義を示している(Deleuze and Guattari 1972 = 1986)。『千のプラトー』では、解放された欲望を持った人々が、中央集権的なツリー状のネットワークによってではなく、脱中心化されたリゾーム状のネットワークで互いにつながることを示唆している。このような解放された欲望をもつ人々は、それぞれの定住する場を持ちつつも、自由に移動する遊牧民というメタファーで捉えられている(Deleuze and Guattari 1980 = 1994)。

ネグリとハートは、20世紀末のグローバル化した世界に現れた権力を帝国と名づける(Hardt and Negri 2000 = 2003)。国民国家と財閥が結託してできた従来の「帝国主義」とは異なり、「帝国」はグローバルに移動しつつローカルに活動する多国籍企業や起業家などに、その存立根拠をもつ。しかし、同じようにグローバルに移動しつつローカルに活動する、格差や貧困や抑圧への抵抗をする団体、人々なども現れる。マルチチュードと呼ばれるそうした団体・人々もまた、グローバル化の中でこそ可能になった。互いの特異性を認め合い、支え合うマルチチュードは、帝国への対抗原理になりうる存在である。こうしたマルチチュードのあり方が、私でも公でもない、共というあり方の母体になり、グローバルな民主主義の基盤になる(Hardt and Negri 2004 = 2005, 2009 = 2012)。

ブリオーは、異なる人の交流を、芸術の創造という観点で説明する。美は天才的な才能によって生み出されるのではなく、作家と作品と観衆の相互作用の中で浮かび上がっていくとする、関係性の美学の意義を強調する。そのような作品の担い手としての作家には、異なる文化に対する敬意をもって定住して根を張りつつ、文化の間を移動して異なる文化を翻訳することで自身の作品へ昇華する姿勢が必要である。つる植物のように空中から様々な場所へ根を張る植物を念頭に「ラディカント」と名付けられたその意志は、グローバル化による単一文化の拡散や、それへの対抗運動としての地元文化原理主義の、いずれにもくみしない。そのような横断的な緊張関係においてこそ美がある。芸術は、参加型民主主義の手段としても注目される(Bourriaud 2002, 2009 = 2022)。

移動と定住の弊害、二項対立を克服するためのヒントは、ここまでで紹介した20世紀後半以降の現代思想によって示唆されてきた。それは、上述したリゾーム、マルチチュード、ラディカントなどの概念として考えられてきた。あるいは資本・国家・民族の三位一体の軛を解消するアソシエーション(柄谷2010)、さまざまな人々が集まって都市の意義を民主主義的なものへ変換していく第三空間(Soja 1996 = 2017)などの概念もそれにあたるのかもしれない。論者によって概念の捉え方は様々である。すでに現実

の存在として見えている概念もあれば、いまだ想像上の存在にとどまっているものもある。

以上をまとめると、グローバルに移動しつつもローカルな場で定住して活躍する主体たちは、自身が依拠する場所や人間関係を持ちつつ、他地域で同じように生活をする異質な他者と交流し、その存在を受け入れることが期待される。地域エゴにとらわれることなく、むしろ広い視野で地域の問題を見つけられるようになり、より大きなアイデンティティを獲得する。アイデンティティそのものが移動しつつ定住することで変容していく。たとえば自然環境を守るというとき、ローカルな場所を大事にすることがもちろん求められるのだが、それに平行してグローバルな視線が求められるはずである。それを可能にするのが移動と定住を兼ね揃えた、あるいはその二項対立を越えた、以上に紹介してきた概念である。

Ⅲ 観光の可能性

ここで、グローバル化の中で大きく増え、そしてコロナ禍のなかで縮小したものの、アフターコロナにおいて再開することが期待される「観光」について考える。観光は、前節で述べてきた、移動と定住の対立を揚棄し、それぞれがもたらす弊害を克服するものとして期待できるからである。観光は異文化交流を促進し平和へのパスポートになること、また産業としても成長しコロナ前までは世界のGDPの相当量を占めていたことを考えれば、観光の復活は政治・経済双方の観点から不可欠である。ただその一方で、観光へのアクセスの可能性という格差、あまりにも多くの観光客が特定の場所に集中することで地域住民が被る弊害なども指摘されてきた。こうした従来型の観光の特徴として、仕事と分けられた余暇時間におこなわれ、観光によって仕事の疲れが癒され、ふだんの仕事に戻っていった時の生産性の向上が期待される (Urry and Larsen 2011 = 2014, 第2章)、ということが挙げられる。そのいっぽう、住民との交流や異文化体験を通して自己を見つめ直し、人間としての成長を遂げる可能性については顧みられてこなかった。アフターコロナにおいて期待されるのは、仕事と余暇という分類をカッコに入れ、人間としての成長を促すような、「新しい観光」である (藤稿2018; 阿部2020; 堀内2020)。本節は、これから展開していくことが期待される、以下に詳述するような新しい観光が、移動と定住がもたらす弊害をも克服していく可能性を考えていく。

まずは、アーリらの定義に倣い、観光を「住まいや労働のある通常の間以外の場所へと向かい、その場にとどまること。そこでの滞在期間は短期でかつ一時的という性質を持ち、比較的近いうちに家へ戻る心づもりがある」という特質をもつものとする (Urry and Larsen 2011 = 2014, p7)。この定義から、観光には、移動しつつもまた定住地へ戻るというように、移動と定住の両側面が入っていることがわかる。また観光客を受け入れる住民は定住している人である。住民は、観光客との交流を通して、移動してきた観光客の視点を獲得することができる。そして、今日において、多くの人が観光客にも住民にもなる。このように、観光は、移動と定住の二項対立を越える現象と考えられる。本節は、観光を、「観光客」(移動する主体)、「住民」(定住する主体)、そして近年になって注目を集めている、観光客と住民の間の存在としての「関係人口」という観点から考察する。それによって、従来の諸概念が捉えきれなかった側面を明らかにする。

前節で取り上げた、移動がもたらす弊害である「人々の孤立を生み出す」「環境破壊の原因になる」「個人の格差を拡大する」という側面と、定住がもたらす弊害である「他者への想像力の欠落」「権威主義的な社会を生みだす」「地域間の格差を拡大する」という側面が、どのように克服されるかを見ていく。その際、カントが『純粋理性批判』『判断力批判』『実践理性批判』において神なしで獲得することを目指した「真なる認識」「美への判断力」「善なる倫理」を参照していく。またアウシュビッツ収容所・ヒロシマへの原爆投下という、人間の悪を深く捉えたフロムの著書『悪について』(Fromm 1964 = 2018) から、

悪を生み出す「依存」「ナルシズム」「死への同着」と対比された「自立」「ヒューマニズム」「生きることへの愛」という概念も参照し、新しい観光の可能性を捉えていく。

1. 観光客

ある種の観光は、カントの言う「真なる認識」を個人にもたらす。真正性 (authenticity) と呼ぶのが適切かも知れない。マキアーネルは、観光社会学の古典『ザ・ツーリスト』において、産業資本主義が高度に発達した現代社会において、現代の中間階級者による余暇の過ごし方としての観光に注目した (MacCannell 1976 = 2012)。高度資本主義の時代において、物質的な満足に飽きた人々は経済的な満足だけではなく精神的な満足を求めるようになる。余暇活動において、真正性を探求することが、観光客の精神的な満足に寄与する。普段の生活を取り巻く近代化社会の正の側面を表象する街並みや工場、負の側面を表象する下水道や死体公示所、そして近代を相対化する未開の地における人々の生活や博物館が、真正な観光の対象になる。じっさいは、そのような観光資源は、偽物、意図的に造られたものに過ぎないのかもしれない。それでも、そのような舞台裏を見出そうとする意欲において、「真なる認識」を得ようとする姿勢が見出されると言える。

このような真正性を探求する新しい観光の具体例としては、従来からおこなわれていたものではあるが、学校の修学旅行や会社の研修旅行、教育現場で行われるフィールドワークなどがあるだろう。これらは産業としての観光の中では傍流で、GDPへの貢献は小さかったかもしれない。しかし、人間の成長という面では多大な効果がある。戦場跡や産業遺産への訪問、職場体験や移住体験、地域の人との交流や現地での課題解決の試行などは、それが教師やガイド、コーディネーターによって先導されたものであり、事前学習でその内容がある程度は予期されたものであったとしても、いやむしろ予期されたものであればこそ、その体験が個人の中に内面化され、普段の生活において反映される。それまでの認識を刷新し、場合によっては転職や移住などの機会をもたらすものである。あるいはグリーンツーリズムやエコツーリズムのように、観光客としてそこを訪れることが、その地域の自然、歴史、文化を守ることにつながる観光も含められるだろう。森林ボランティアや農業ボランティアなどのように他人のために働くという経験や、旅先での倫理的消費なども、人々に意識の変革をもたらす。コンテツツーリズムも、それまでなんの変哲もない景色だった場所が、映画やアニメなどの舞台となったことで、あるいはVRゲームの舞台となることで、独自の意義が見出されるようになる。景色の美しさが観光客によって再発見され、観光客と住民が地域をより美しく守り造るきっかけになる。そのようにして真なる認識を追求した観光客の日常は、旅の後に変わっているはずである。観光客としてだけでなく、いま自分たちが暮らしている地域や職場を変えていこうとする気持ちにもなる。

地域の価値は、その地域に暮らしている人間は必ずしも見つけることができない。地域のシガラミから自由な「よそ者」によってこそ、普遍的な価値を発見できる。鬼頭秀一はこのような「よそ者論」を、白神山地の保全運動のケーススタディなどで議論した (鬼頭1996)。普遍的な立場に立ち、シガラミにとらわれないよそ者だからこそ、地元住民が気づかないでいた地域資源の普遍的価値を発見することができるのである。こうしたよそ者は、地域資源の価値に気づいておらず、目先の利益しか考えていない地域住民と対立することもあるだろう。そうした対立・矛盾を話し合いなどで克服することで、自由を獲得できるのではないか。そのようなよそ者は、自身で判断し、意見を異にする他人とも話し合いができる人間である。フロムが悪の原因とした「依存」から脱却して、「自立」を獲得するはずである。ここにおいて、移動がもたらす弊害「人々の孤立を生み出す」、定住がもたらす弊害「他者への想像力の欠落」は回避されている。

2. 住民

住民が、自分達が定住している場所の美しさに気づき、つまりカントの言う「美への判断力」を持ち、それを守ろうとするためには、前節で示したように、観光客という外部からの視線が重要な役割を果たすことが多い。しかし、じっさいにその地域を守り造っていく主体は住民である。外部資本や行政の主導による住民の意向を無視したまちづくりでは、環境が破壊された画一的な景観になってしまいかねない。住民が関心と責任をもって参加するまちづくりが求められる。

みずからの住む街を、観光客の視線をきっかけにしてつくりあげていく「観光まちづくり」は、行政に頼りきりになることが多かった地域計画とは一線を画すものとして期待されてきた。安村克己は、著書『観光まちづくりの力学』（安村2006）において、「観光まちづくり以前に住民が自らの地域社会をつくる」という発想は、日本では思いもよらなかった。住民にとって地域社会は“所与”、すなわち“そこにあるもの”と認識される。それが観光まちづくりでは、地域社会は“そこにつくるもの”となる。観光まちづくりの“作為の契機”は、住民が地域社会を“そこにつくるもの”としたのである」と論じている（同書、序文）。国土交通省などでも観光まちづくりは推進されているが、そこにおいて重視されるのは、観光客を受け入れることをきっかけとした、地域住民の気づきである。

観光まちづくり論は、その理論的な基礎を、鶴見和子らによって構築されていった内発的發展論にしている（鶴見1996）。鶴見らは水俣病のケーススタディを進める中で、被害者たちが外部からの協力者と連携することで、チッソや国との裁判闘争を進め、また自助グループをつくったことを示している。地域住民が自らの地域を持続的に発展させる上において、その地域住民だけで固まるのではなく、外部からの移住者や訪問者を巻き込むことが求められたのである。

観光まちづくり、あるいは内発的發展論には、老若男女、様々な職業、収入、健康状態、国籍などを問わず、多様な人々の参画が期待される。多様な人々の立場を想像することで、自分達が暮らす地域の美しさを普遍的な観点から理解し説明ができるようになる。そこに見られるのは、フロムが悪の原因とした、住民が自分たちの狭い世界に閉じこもることによる「ナルシズム」ではなく、他者に普遍的に開かれた「ヒューマニズム」である。このようにして守られる美しい地域は、移動がもたらす弊害である「環境破壊」を防ぐことができるだろう。そして、定住がもたらす弊害である「権威主義」もまた、参加型民主主義という観点から防ぐことが期待できる。

3. 関係人口

人口減少が世界で最も進んだ日本において、その対策が講じられてきた。人口減少の背景にある諸要因のなかでも、若年者の東京一極集中による少子化が問題視され、若年者の地方への移住を促進する地方創生事業が展開してきた（増田2014）。地方は、特に若年の移住者を呼び込むことをうながされ、それぞれの地方が様々なメニューを用意し、移住者の呼び込みを進めてきた。しかし総人口が減っていく日本において移住者の総数は限られている。ある地域が多くの移住者を獲得すれば、他の地域はそのぶん人口を奪われる。人口という、限りある資源をうばいあうゼロサムゲームの様相を呈してしまう。移住者獲得のモデルとされる地域はあるが、それらは全市町村の中のごく一部であり、全ての市町村が移住者を獲得できるわけではない。

そのような中で、近年に注目されているのが関係人口という考え方である。関係人口とは、交流人口（観光客）と定住人口（住民）の間にある存在形態として、その可能性が議論されてきた概念である。関係人口が広がることで、人口という有限な資源を求め競争するのではなく、一人一人の人間が複数の地域・人々と関わりあうことが期待される。人々の地域への関わりを増やしていくことで、人口減少は進んでも人間関係の豊かさを増していこうとする。ここには、皆で人口減少の痛みを分かち合いつつ、関

係性の利益を増加し、共有しようとする、カントの言う「善なる倫理」を見ることができよう。

実際のところ、関係人口という概念自体が新しいため、まだその十分な整理がついてはいない。そのような中で、田中輝美は、関係人口という概念を通して地域課題の解決につながる主体の形成に注目している（田中 2021）。島根県海士町、島根県江津市、香川県まんのう町の事例を詳しく紹介しながら、高校の存続、商店街の再生、集落の尊厳が守られていく過程を示している。そこでは、決してスーパースターではない人々が様々な縁で関わり合うことで、人々の意識やネットワークが変化していく。ネットワークの変化、豊穰化によって、人々が人口減少の課題を解決する主体へと形成している。関係人口としてあることによって、人々は変わりゆくアイデンティティを自身の可能性として受け入れていくのである。

関係人口は日本独特の概念とも言える。欧米でも、ライフスタイル移住（Benson and Osbaldiston 2014）、多地域居住（McIntyre et al. 2006）などの概念が提示されている。そこで想定されるのは、都会とは違う自然豊かな環境で暮らすことであり、人間関係を構築することは必ずしも重視されていない。人口減少が急速に進み、人々の関係性が希薄化していく中で様々な問題が起こってきた日本だからこそ、関係人口という概念が生まれてきたのかもしれない。

関係人口として、個人間で、地域間で、多様な関わりが展開していく。自分だけ、あるいは自分達の地域の利益だけを考えて弱肉強食の競争に勤しむ姿勢はここでは見られない。資源を巡って競争に負けたものだけでなく、勝つものも、終わりのなき競争の中で、フロムが悪の原因とした「死への欲望」に至っている。関係人口は、多様な関わりを通して「生きることへの喜び」をもたらすのである。そのようにして可能になる世界において、移動の弊害である「個人間の格差」も、定住の弊害である「地域間の格差」も抑えられることだろう。

Ⅳ 考察

本稿は、ジョン・アーリの『モビリティーズ』での議論を参照して、移動と定住についての再検討をおこなってきた。移動と定住によって、理性とコミュニティが可能になるものの、移動によって「孤立」「環境破壊」「個人間の格差」、定住によって「他者への想像力の欠落」「権威主義」「地域間の格差」が生じるという弊害もあった。観光という現象の意義を考えることで、これら弊害を克服する可能性を考えてきた。

観光の可能性について、もちろん留保は必要である。例えば、観光である場所を訪れても、自分が同一化できる対象を見つけるだけでは孤立は解消しない。その情報を狭い仲間内で共有するだけであれば他者への想像力は欠落したままである。環境破壊を気にしない観光が繰り返されるかもしれず、そうした観光を強権的に抑止しようとするれば権威主義的な社会による束縛が支配的になってしまうだろう。一部の特権階級だけが楽しめるような観光が広まり、そういう大金持ちを呼び込もうと地域があくなく競争をすれば、個人間格差も地域間格差もますます広がってしまう。これらの弊害を克服する新しい観光の必要性は、コロナ禍以前から指摘されてきたのである。改めてそうした観光がアフターコロナの中で広がっていかないとはいえない。

そのためには、多様な人に観光が開かれる必要がある。自動車・飛行機を使っでの移動などについては格差が生じる。最も良いのは、相互交流が起こりやすい移動、たとえば「歩く」ことである。歩きやすい道路、環境、歩くことで可能となる人々との出会いが可能な街。人々が半分は匿名で、半分は知り合いである期待をもちながら歩き回れる空間は、人々を自由にするだけでなく、都市の生活を豊かにし（Jacobs 1961 = 2010）、イノベーションを可能にしてくれる（Florida 2012 = 2014）。ソルニットは、古今東西の文献を紹介する中で、歩くことの意義が18世紀以降に発見されてきたこと、しかし近年の郊外化でその場が失われつつあることを紹介している（Solnit 2001 = 2017）。歩くことへの障害を持っている人

Mar. 2023

移動と定住の弊害を克服する

もいるだろう。車椅子や盲導犬などでの移動を補助することが求められる。観光する権利が、観光のための潜在的な能力 (Sen 1992 = 2018) の発現が、多くの人に開かれるべきである。そのことによって、より多くの人が自分にとって望ましい生き方や人との関係を発見できるようになる。多様な意見がありえることが実感できるようになり、ネットでありがちな、極端な意見に拘泥することを回避できるようになる。そして観光によって、普段の生活の範囲と離れた場所にいる人との繋がりが可能になること。こうした弱い紐帯が、当人の転職や昇進などにおいてプラスの役割を果たすことは、社会関係資本の議論の中でも確認されてきたことである (Granovetter 1995 = 1998)。仲介者による弱い紐帯を伴うことで、観光が様々な地域課題の解決にもつながることも示されている (堀内2020)。

移動と定住の弊害を克服する観光が広がっていくためには、そうした観光を良しとする価値観が広がっていく必要がある。そこで注目されるのは、近年の観光において繰り広げられる SNS での情報共有である。新しい観光を通して「真なる認識」をもった「自立」した観光客が生まれ、「美的な判断」と「ヒューマニズム」を獲得した住民が育ち、かかわり合いを共有する「善なる倫理」をもって「生きることの喜び」を得る関係人口が活躍する。そのような経験を「イイね!」などの表現で良しとする価値観が、SNS を通して広がるならば、新しい観光の可能性は開かれる。

このように人々の自発的な動きで新しい観光が広がっていくのに合わせ、行政的な後押しも求められる。日本において、コロナ禍のなかで、観光業者を支援するための様々な取り組みが進められてきたが、ただの補助金のバラマキにするのではなく、新しい観光を良しとする価値観を広めるため、そのような観光客、地域、関係人口に焦点をあわせた支援が求められる。教育機関での観光教育も必要だろう。そのために、産官学連携等によって、観光の意義を、ただ雇用をもたらすということではなく、移動と定住の弊害を超えた果実をもたらすものとして広めていく必要がある。これからの課題である。

謝辞

本稿は、匿名の査読者2名からの貴重なコメントによって大幅に改善いたしました。また本研究は、JSPS 科研費 21K12469 の助成を受けました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- Bauman, Z. 2001. *Community: Seeking Safety in an Insecure World*. = 2008. 奥井智之 (訳) 『コミュニティ：安全と自由の戦場』ちくま学芸文庫
- Benson, M., Osbaldiston, N. (Eds.) 2014. *Understanding Lifestyle Migration: Theoretical Approaches to Migration and the Quest for a Better Way of Life*. Palgrave Macmillan.
- Bourriaud, N. 2002. *Relational Aesthetics*. Les presses du reel.
- Bourriaud, N. 2009. *Radical: Pour une Esthétique de la Globalization*. = 2022. 武田宙也 (訳) 『ラディカント：グローバリゼーションの美学に向けて』フィルムアート社
- de Haas, H., Castles, S., Miller, M. J. 2020. *The Age of Migration (6th eds.): International Population Movements in the Modern World*. Red Globe Press.
- Deleuze, G., Guattari, F. 1972. *L'Anti-Œdipe: Capitalisme et Schizophrénie 1*. = 1986. 市倉宏祐 (訳) 『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症』河出書房新社
- Deleuze, G., Guattari, F. 1980. *Mille Plateaux: Capitalisme et Schizophrénie 2*. = 1994. 宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明 (訳) 『千のプラトー：資本主義と分裂症』河出書房新社
- Durkheim, E. 1897. *Le Suicide: Étude de Sociologie*. = 1985. 宮島喬 (訳) 『自殺論』中公文庫
- Elliot, A., Urry, J. 2010. *Mobile Lives*. = 2016. 遠藤英樹 (監訳) 『モバイル・ライブズ：移動が社会を変える』ミネルヴァ書房
- Florida, R. 2012. *The Rise of the Creative Class Revisited*. = 2014. 井口典夫 (訳) 『新クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社
- Fromm, E. 1964. *The Heart of Man: Its Genius for Good and Evil*. = 2018. 渡会圭子 (訳) 『悪について』ちくま学芸文庫

- Granovetter, M. 1995. *Getting a Job*. = 1998. 渡辺深 (訳) 『転職：ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房
- Hardt, M., Negri, A. 2000. *Empire*. = 2003. 水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実 (訳) 『帝国：グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社
- Hardt, M., Negri, A. 2004. *Multitude*. = 2005. 幾島幸子 (訳) 『マルチチュード：〈帝国〉時代の戦争と民主主義』NHK出版
- Hardt, M., Negri, A. 2009. *Commonwealth*. = 2012. 水嶋一憲 (監訳) 『コモンウェルス：〈帝国〉を超える革命論』NHK出版
- Hegel, G. W. F. 1832. *Phanomenologie des Geistes*. = 1998. 長谷川宏 (訳) 『精神現象学』作品社
- Heidegger, G. 1960. *Der Ursprung des Kunstwerkes*. = 2008. 関口浩 (訳) 『芸術作品の根源』平凡社
- Jacobs, J. 1961. *The Death and Life of Great American Cities*. = 2010. 山形浩生 (訳) 『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会
- Kant, I. 1787. *Kritik der Reinen Vernunft*. = 1961. 篠田英雄 (訳) 『純粹理性批判』岩波文庫
- Kant, I. 1788. *Kritik der Praktischen Vernunft*. = 1979. 波多野精一・宮本和吉・篠田英雄 (訳) 『実践理性批判』岩波文庫
- Kant, I. 1790. *Kritik der Urteilskraft*. = 1964. 篠田英雄 (訳) 『判断力批判』岩波文庫
- MacCannell, D. 1976. *The Tourist: A New Theory of Leisure Class*. = 2012. 安村克己ら (訳) 『ザ・ツーリスト：高度近代社会の構造分析』学文社
- McIntyre, N., Williams, D., McHugh, K. (Eds.) 2006. *Multiple Dwelling and Tourism: Negotiating Place, Home and Identity*. Cabi.
- Piketty, T. 2013. *Le Capital*. = 2014. 山形浩生・守岡桜・森本正史 (訳) 『21世紀の資本』みすず書房
- Putnam, R. 2000. *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*. = 2006. 柴内康文 (訳) 『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房
- Sandel, M. J. 2020. *The Tyranny of Merit: What's Become of the Common Good*. = 2021. 鬼澤忍 (訳) 『実力も運のうちは：能力主義は正義か』早川書房
- Sen, A. 1992. *Inequality Reexamined*. = 2018. 池本幸生・野上裕生・佐藤仁 (訳) 『不平等の再検討：潜在能力と自由』岩波現代文庫
- Sheller, M. 2018. *Mobility Justice: The Politics of Movement in an Age of Extremes*. Verso.
- Sheller, M. 2021. *Advanced Introduction to Mobilities*. Edward Elgar Publishing.
- Soja, E. W. 1996. *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-and-Imagined Places*. = 2017. 加藤政洋 (訳) 『第三空間：ポストモダンの空間論的転回』青土社
- Solnit, R. 2001. *Wanderlust: A History of Walking*. = 2017. 東辻賢治郎 (訳) 『ウォークス：歩くことと精神史』作品社
- Urry, J. 2007. *Mobilities*. = 2015. 吉原直樹・伊藤嘉高 (訳) 『移動の社会学』作品社
- Urry, J. 2016. *What is the Future?* = 2019. 吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美 (訳) 『〈未来像〉の未来：未来の予測と創造の社会学』作品社
- Urry, J., Larsen, J. 2011. *The Tourist Gaze 3.0*. = 2014. 加太宏邦 (訳) 『観光のまなざし 増補改訂版』法政大学出版局
- ベルク, オギュスタン. 1996. 『地球と存在の哲学：環境倫理を越えて』ちくま新書
- 阿部大輔 (編著). 2020. 『ポスト・オーバーツーリズム：界限を再生する観光戦略』学芸出版社
- 柄谷行人. 2010. 『トランスクリティーク』岩波現代文庫
- 鬼頭秀一. 1996. 『自然保護を問いなおす：環境倫理とネットワーク』ちくま新書
- 高山守. 2016. 『ヘーゲルを読む：自由に生きるために』放送大学叢書
- 田中輝美. 2021. 『関係人口の社会学：人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会
- 鶴見和子. 1996. 『内発的發展論の展開』筑摩書房
- 藤稿亜矢子. 2018. 『サステナブルツーリズム』晃洋書房
- 堀内史朗. 2020. 『観光による課題解決：グローバリゼーションと人口減少の歪みを越える』晃洋書房
- 増田寛也 (編著). 2014. 『地方消滅：東京一極集中が招く人口急減』中央公論社
- 安村克己. 2006. 『観光まちづくりの力学：観光と地域の社会学的研究』学文社
- 和辻哲郎. 1979. 『風土：人間学的考察』岩波文庫
- 和辻哲郎. 2011-2012. 『日本倫理思想史 1-4』岩波文庫

(2022年12月7日掲載決定)